

高山

たかやま
高山の原生林を守る会

会報 第 89 号

2014年6月



第 133 回自然観察会～奥土湯ブナ林観察会に参加して 早川 秀輝

昨年9月に入会してから、初めての参加でした。平成16年度から全国森林インストラクター会の会員になって以来全国の森を対象に森林歩きをしてきましたが、本県の森については不案内のため、いろいろと模索した結果ブナの森に焦点を当てることにしました。

昨年は奥只見のブナを観察し、只見町ブナセンター友の会の会員になり奥只見行きを心がけています。

高山については、幕滝周辺を主体に散策していましたが、今回(2014. 4. 29)20名の会員の皆様と高山の裾野である奥土湯のブナ林を見ることができたことは大きな喜びでした。

1週間前から天気予報に注意してきましたが、29日はあまり良い状況ではないと判断をし、それなりの心構えで集合場所に来ました。しかし、気圧を見ると市内で1,024hPa、荒井で1,020hPaとかなり高いことと、土湯温泉に向かう途中の山で気流が上昇していることから、天候はかなり良くなるのではと思いましたが、全くその通りで、最高の天候に恵まれました。6台の車に分乗し、女性14人、男性6人が8:25に男沼林道不動湯分岐付近の広場に到着し、大ブナの林を目指して出発です。



気持ちの良い2次林(ミズナラ-クリ林)



ブナの芽生えがありました



ブナの芽生えです

コースは梅森(918m)と台ガ森(1,006m)の南斜面標高650~850mの林道と送水管路で、南に鬼面山(1482m)と箕輪山(1718m)を西に幕滝付近の森林(標高1350m)を見ながら片道約3kmを歩きは3時間、帰りは2時間、昼食を含む休憩時間1時間半というゆったりとした行程です。

初めに驚いたことは、行程の半分以上にカタクリの群生地が見られたことで、その面積は、10haを優に超えており、樹高10~15mのミズナラを主体とした落葉広葉樹の明るい樹林帯で、いたる所にオオヤマザクラのピンクの花が咲き、まさに自然の森林庭園です。途中で炭焼窯の跡が数個散見され、かつてこの付近の樹木が炭に焼かれ、この地帯が二次林であることを示しているが、樹齢や窯跡の古さなどから40~50年間は放置されていると思われるものの林床植生が人の手が入った里山であるかのようにあるのはなぜか。

おそらくは、ササが入りにくい状況の中で雪と寒さが人の手の役をしているのだろうか。

そして3時間半後の12:00pmに目的の高山最大の、いや最大であった大ブナの元に到着した。9日前に下見調査に来た佐藤会長たちによってこのブナが昨年から今年にかけて死滅したことを確認していた。今朝集合したときにそのことを知らされ、現場に着いて我々はその臨終に立ち会ったかのようなようでした。

直径約1.5m、高さ約2.5m、中心部に直径約70cmの空洞が形成されたブナの巨木が、残っていた大枝(昨年の結実の殻を沢山付けていた)を北方向に倒し、枯死していた。周囲には数年かけて大枝が四方に倒れており、2007年11月25日に撮影された姿では4本の大枝が存在していた(一部は枯れていた様である)。かつて、白神山地で樹齢400年に近いと言うブナの巨木(マザーツリー)を見たが、それに匹敵するものでした。青森に比べ南方なので300年は超えているかと思われた。

ブナの樹齢は300~400年といわれる中で、この様なブナを見ることができない日本は、素晴らしいと思います。そしてここ高山のこのブナの周囲には100年を超えるブナが無数にあることも驚きです。

一方、行程の途中に針葉樹の植林地が3か所あり樹齢15~25年の杉あるいは檜の単一林で枝打ちも間伐も十分でなくかなり荒れており、落葉広葉樹林の美しさとは比較にならず、深い憂慮の念を持ちました。やはり日本の森は、東北大大学院教授清和研二先生が自鏡山(312m)一岩手と宮城の県境にあり一関ICより国道457で約30km西方へを引合いにだし述べている多種共存の森が、理想なのかもしれない。

それにしても福島県の県都福島市からわずか20kmほどの距離で、この様な天然の森林庭園を持つ我々は、なんと幸福な県民・市民なのでしょう。

また、高山の原生林を守る会の一員として今後活動出来ることを喜びとしたいです。

蛇足ですが、枯死した大ブナの表面の一部分を持ち帰りスクリーニング法で放射線量を測定した結果59Bq/kgの値となりました(CsI-TI-シンチレーション検出器)。

荒井方面は、線量が低いとされているが、平地に比べ森林はかなり汚染されているようです。従って、山中の動植物もまた汚染されているので山菜等の採取には十分注意が必要です。

(2014. 4. 30記)



成熟したブナ林を行くと



ぽっかり空いた空間にブナが



主幹は昨年秋以降に折損



木部は完全に朽ち、内部は大きな空洞に

第 133 回自然観察会 スプリングエフェメラルと巨大ブナの観察 奥土湯ブナ林

2014. 4. 29 今井榮子

皆さん ありがとうございます。

奥土湯ブナ林への出発は、肌寒かった。落ち葉を踏み、歩き始めて5分。カタクリが恥ずかしそうに下を向き花弁を閉じていた。

木々は芽吹きを始めたものの、木肌は丸出し箒を逆さにした様な林。猿が挨拶に顔を出し、ゆっくりと青空が広がり、鬼面山・箕輪山の残雪がくっきりと

『里山の 木々の芽吹きは もえぎ色 目立つは残雪 鬼面の稜線』

麓には大山桜が、赤々と、何とも春先の景色・匂い・体感。本日の参加者だけが得たこの感覚

『青い空 残雪残る 鬼面山 観てよと咲くは 大山桜』

道なき道に赤いテープの印をつけ、土湯の水源パイプを見ながら、目当ての大ブナ様にたどり着くと、本日のパンフレットの顔がそこに、一人独り内側を覗いた。「長い間お山の守り木として、有難う御座いました。本当に、お疲れ様でした。皆が、癒されました。」と話した、私でした。

『昼食は 右に古木の ブナ株を 珍味をもらい 満腹うれし』

下山は予定通り1時発。何と無く緊張が解れ、自分流に楽しみ、道草もできた。初めての参加だったので、先頭の後を歩行は同じくして迷惑をかけないようにと頑張って歩いた。色々と初めて聞く説明に、驚き・溜息をつき、無知を知り、参加した嬉しさを味わった。

『ブナの芽と カタクリの芽は 一年生 大きく育て 里山頼む』

復路のカタクリの花は、太陽に起こされ、花びらをしっかりと開き 歓迎なのか・笑っているのか・名残を惜んでいるのか、

いずれにも見えた。カタクリの花は7年目に咲くという説明に、これから毎年咲いていけらうと思う小さな芽や葉が沢山あった。

『天候と 自然に招かれ 奥土湯 心は一つ 自然観察』

ブナの芽や双葉も教えていただき、ここはこれからも自然が残って行けらう。守って行かなければならないと思いつつ足を速めた。

『落ち葉踏み 自然観察 カタクリと 初めの場所へ 楽しく戻る』

出発点に戻ったのはおよそ午後3時、13000歩。6時間コース。体は最高、本当に参加できた嬉しさを感じる。ありがとうございます。

『今回は 初顔ですよ 無知ですよ 任せていいの A4 1枚を』



フデリンドウ



タチツボスミレには訪花昆虫が



エイザンスミレ



咲き終わりのカタクリ

第 134 回自然観察会 古霊山自然林新緑観察会 阿部 トシ (2014. 5. 25 曇り)

今回の目的地、古霊山。霊山は何度も行っていましたが、この名は初めて知りました。歴史に残っている山のようなです。標高は782.5mで霊山(825m)とはさほど差はありません。家に帰ってから“福島市周辺の山”(福島キャンパスの会)の本を開いて見ましたら、9年前に佐藤恭二さんの山行記録が載っていました。観察会に出る前に読むべきだったと反省しました。

新緑の中、何があるのか、何が咲いているか、期待を心に集合場所の小鳥の森駐車場へ。私は前回に続き参加をさせていただきました。昨年は中々参加できず、高山の会の会報を見て、行った気分浸っていました。小鳥の森から114号線を霊山子供の森を過ぎてから左に入る林道を道なりに民家、牧場、畑を目にしなが、荒れた林道



クリタマバチの虫嬰



キバナウツギ

の入り口に。今回の観察会の入り口です。歩き初めの標高は600m位と思います。足元にウルイがありました。このウルイがオオバギボウシになる事が解りました。ウツギの種類も多く、私はタノウツギとノノウツギしか知りませんでしたのでこれもびっくりです。



ヤマツツジ

木の芽と思って見ていた丸い芽は、実はこの中に幼虫が居ると聞きびっくりと同時に爪で半分に、他の人がカッターで輪切りに、ルーペで見ると幼虫が動いていました。私もルーペを借りて見て、本当に驚きました。芽の中で幼虫が育てられているとは。早速、守さんにルーペを譲っていただき観ることになりました。奥深さを知り、この世界の楽しさが解った気がしました。ハナイカダにはオスとメスの木があり、花をルーペで見ると違いが解り、感動しました。藪を歩いて行くと、今回の目的のブナは稜線を少し下ったところにありました。樹齢何年か、凄く太く、3人で腕を回し計ると約5m位ありました。こんな所になぜ、里山にも太いブナがあることを知り、驚きと会えた嬉しさで気持ちがいっぱいでした。又、その周りにはヤマウツボとクルマバツクバネソウがあり、凄いと思い、ここに案内して頂いた事、皆さんに感謝です。ヤマウツボは初めて見ました。ギンリョウソウとショウキランは見たことがありましたが、山道を歩くだけで、今日の楽しさは知りませんでした。



クルマバツクバネソウ

雑草の中、藪の中、山の中、無限に夢が広がりました。しかし、未踏の地の植生は奥が深いとも思い、絶滅危惧種を間近に観察させて頂き、ありがとうございました。これからも興味を持って山を楽しみたいです。宜しく願い致します。昼食も楽しく、皆さんの味を堪能させて頂き満腹で幸福いっぱいでした。



ケヤマウツボ



ベニシジミ



ウスバシロチョウ

最後に、今回、残念に思った事は原発事故によって里山が廃墟同前に荒れた状態にあることを見て、がっかりさせられました。広い牧場、ワラビ畑等々、考えさせられました。

2011年3月11日の東日本大震災から3年の年月が過ぎ、新地町では高台集団移転の造成地に家が建ち始めました。我が家の西側、田んぼを隔てた先にも10軒くらい同時に建築中です。この造成地は以前、広い畑でした。今年の作付けが最後かもしれませんが、建築中の家の側で野菜が育っています。ここには釣師浜方部の方々が越してくるようです。

私の知人も、看護師をしている長男が嫁さんを連れて今度帰って来ることになり、職場も近くに見つけ孫も生まれるし、あそこに家を建てることにした、近くになるからよろしくねと、笑顔で言っていました。彼女の家は、2階から眺める海の風景がとてもきれいでしたが、本当に海の側でした。それで、あの津波で家屋すべてを流したのですが、避難勧告に従って早めに避難したために命だけは助かったのです。家を新築するとなればある程度まとまったお金も必要だし、借金もあるでしょうが、しっかりした息子さんがいて生活が再建できるのは恵まれたケースと思われました。

また、もう一人の知人は、1階部分に津波が押し寄せて住めなくなり、2年間は仮設暮らしでした。しかし、夫婦二人の生活で、子ども達は家を離れているし、多分戻ってこないだろうから家を直して住むことにしたと言っていました。海岸からはある程度離れているので、危険区域に指定されていないから、直して住むことが出来たのです。高台移転をしようかと悩んだが、将来的なことや経済的なことを考えて直すことに決めた、また今度地震が起きて津波が来ることになったら、すぐに逃げると言っていました。

それぞれの家庭で色々な事情があり、事情に合わせて住み所を決めたようです。家族や家、土地、財産、職、等々、それぞれに失ったものは大きいでしょうが、震災から3年が過ぎ、それぞれに決断して新しい生活を始めていることを感じました。

沿岸部の方では防災緑地の盛り土が進んでいます。昨年までは海のすぐ側まで行くことが出来ましたが、この工事のために立ち入り禁止になっていました。盛り土の土が足りないので、町では横浜市の公共事業で出た土を山元町と共同でもらう協定を結びました。以前も書きましたが、震災前ならば、違う土地から大量の土が入って来れば、この地方の生物の遺伝子や植生への影響を心配し、疑問を感じたかもしれません。しかし、今は防災緑地が早くできると良いなと思っています。町では、単にかさ高な防潮堤ではなく、防災機能を確保しながら地域の再生や美しい景観、豊かな自然の再生を考えて大きな森を作ることにしたのです。公園作りは一気に完成するものでなく、みんなで作り、育て、成長する公園を目指すということでした。国道からは海が丸見えで、やはりここに津波の勢いを押さえてくれるものがないことは不安です。防災緑地が出来れば、少しは安心できるでしょう。しかしながら、盛り土の山はまだ所々にあるだけで、ここが大きな森になるとは考えにくい状況です。まだまだ大量の土が必要なのだと思います。

また、常磐高速の工事が急ピッチで進んでいます。大型機械の威力はすさまじく、あっという間に南北に幅広く山を切り開きました。12月には山元IC～相馬ICが開通するという事です。鹿狼山の麓に国道113号線につながる新地ICが出来ます。このICが出来たら、鹿狼山に桜やツツジを植えて名所にし、観光客を呼び込もうという案もあるようですが、それは止めてもらいたいものです。鹿狼山は昔からの里山ですから、人の手が入り、一部植栽されているものもあります。しかし、イヌブナ・モミを始め、コナラ・シデ類、その他この地方の気候にあった樹木や草花が沢山自生しています。四季折々に移りゆく自然の姿を沢山の人が楽しんでいました。このままの姿で次世代に残した方が良いでしょう。

今、浜通りでは、沢山の大型トラックが土埃を上げて行き交っています。他県ナンバーの車もずいぶんあります。山を切り崩し、土砂を削り取り、右から左へと移動し、次々に盛り土をしたり道路を作ったりしているけれど、本当にこれでいいのか。自然を短期間に大きく変えていって、それで今後は大丈夫なものなのかと思います。誰か予報士のような人がいて、ここまでは大丈夫だけど、これ以上は駄目ですと、教えてもらいたいものですが、時間が過ぎてみないと分からない事です(2014/06/15 記)。



造成地に家が建ち始めた



防災緑地公園の盛り土が始まった



常磐道の工事が進んでいる

「大震災が教えてくれたもの」X

「福島第一原発から12kmの日隠山を歩く」

奥田 博

4月某日、震災前に歩いた以来、久し振りに大熊町の日隠山(ひがくれやま)を歩こうと思いました。その前の週にNHKで避難している大熊町住民が登っている様子が放映されました。線量も低いので、故郷の住民にも登って欲しいという内容でした。帰宅困難地域にあるが、出入りは可能なようなので早速出掛けた。今回は、時間もないので途中の林道を使って入ってみることにした。県道36号線から麓山を見て県道35号線に入り、住民不在の町を走る。周囲には、除染作業中の看板や作業者のスクリーニング施設がある。もっとも目を引いたのは、真っ黒な除染袋が四段重ねで奥まで置かれた場所だ。その数は無限と呼べるほどで、もちろん今まで見たことも無い規模だ。それが何個所も見られるのは、それだけ深刻な状況であることを物語っている。林道入口を行き過ぎて、その先に通行止めの検問所があり警察官が立っていた。車を戻して「林道日隠山線」に入って間もなく、ブルトラーザーで道を均している。作業員が出て来て「明日、環境省の視察があり、作業中なので入れない」という。明後日以降は入れるというので、出直しになった。

以前に民友新聞に次のような記事が載った。以下、掲載内容です。

震災と原発事故の影響で大熊町から須賀川市新町に避難している鎌田清衛さん(71)は、薄れゆく故郷の記憶を後世に伝えたいと、故郷の山の名前の由来などをまとめた「日隠山に陽は沈む」を自費出版しました。鎌田さんは昭和17年茨城県生まれで、5歳の時に大熊町に転居。果樹園を経営していたが、30歳代に歴史や郷土に興味を持ち、現在も町文化財保護審議委員や大熊ふるさと塾の顧問などを務めています。

鎌田さんは大熊町で一番高い日隠山(標高 601.5メートル)の名前がなぜ「ひがくれ」と呼ばれているのか、との疑問を持ち、約25年かけて調べた調査内容を中心に掲載。「山の名前が日没と関係しているのではないか」との仮説から、その後の調査で春分と秋分の年 2 回のみ海渡(みわた)り神社の神殿と日隠山頂上を結ぶ直線上に日が沈むことを、当初の仮説通り山の名前と日没との関係を確認しました。そして、平成23年3月20日に山頂に日が沈むことを観察する観察会を開く予定でしたが、前日に震災が発生し中止となっていました。

また鎌田さんは「中間貯蔵施設の設置が決まれば、二度と日隠山に陽が沈む景色が見られなくなる。本ではこの景色を次世代に残せるようお願いを込めている」と話していたという。中間貯蔵施設とは、何と悩ましい施設であろうか。日本のために、どこかに造らなければならない施設だが、造られた周辺の住民は、永遠に帰宅困難になってしまう。例え施設を外れたとしても、その隣に住めるだろうか、住む気になるだろうか。周辺住民には、バッファゾーンのような考えを導入して、土地と家屋の買上げ対象にすべきだろう。いずれにしても、故郷を捨てる無念さは残り、「日隠山に陽が沈む景色」を失ってしまうことに変わりはない。

日を改めて5月4日、日隠山を訪れた。塩の道として使われていたという登山道を登るが、多少藪が覆いかぶさる程度で、歩き易い道が森の中に続いていた。線量は高度を上げるにつれて高くなる。林道を横断する尾根に載った場所で2.56 μ Sv/hであった。最大線量は、分岐手前アカマツやモミ林の中で4.02 μ Sv/h、原発の見える望洋台では1.25 μ Sv/h、山頂は0.65 μ Sv/h と他の山頂同様に低かった。登山道を細かく計測して行けば、線量の高い個所も低い個所も現れることは、今までの計測で分かっている。ホットスポットも各所にある。私のような老人ならともかく、この山に登山を勧めるのはいかながなものか。昨年だったと思うが、Web上に子供たちを連れて登った記録がアップされたが、無責任な行動だと思う。先日、そのサイトを探したが削除されていた。日隠山は予想通り、高い線量で老若男女が歩くには程遠い山であった。ただ大ブナも大クヌギも元気に健在だったのが救いだった。



うず高く積まれた除染物の袋 (左) 望洋台からの第一原発 (中) 新緑を出した大ブナ (右)

イワカガミ (*Schizocodon soldanelloides* イワウメ科イワカガミ属)

ブナ林から偽高山の礫地に植生する常緑多年草。木本植物とする解説もあるのでイワウメと中間的な性質を持っているのかもしれない。常緑であるが、冬になると陽光面が紫色に変色する。これは、冬季の低温と強光により葉の光合成機能が阻害をうけやすくなるので、葉にアントシアニン系の色素を蓄積し、葉緑体に直接強い光が当たらないようにしているためである。日本に植生するイワウメ科の植物はイワウチワ属、イワカガミ属、イワウメ属の3属のみである。この中でイワカガミ属が最も植生域が広く、形態的な変化も多い。

葉は数枚の根生葉のみである。葉の形は円形～円卵形で葉柄側は深く切れ込む。葉縁には尖った鋸歯がある。葉は厚みがあり、表面は光沢がある。葉脈は主脈から側脈がろっ骨状に分かれる。

花は、頂性。花柄の先端に総状花序を形成し、数個の漏斗状の花がうつつむいた様に咲く。花冠は深い裂刻で5中裂し、更に先端が細く裂ける。雄しべは5本で、更に花冠のつけ根部分に仮雄しべが5本ある。この雄しべと仮雄しべの着き方はイワウチワと同じである。萼片も5枚で、花は5数性を示す。花の色は透明感のある桃色、花柄と萼片は茶褐色である。

イワカガミが群生する姿は花の色を反映して極めて華やかである。高山植物の人気者と言って良いだろう。登山を始めた頃は、イワカガミ＝高山植物と刷り込まれていたのだが、森林植生に興味を持ち始めるとブナ林の上部あたりでもイワカガミを目にすることがあり、果たして、稜線に咲く種類と同じものなのかと疑問を持つようになった。高山型のコイワカガミという種類があることを知り、葉の形などを注意して観察してみたが、今のところ森林に咲くイワカガミと稜線の砂礫地に咲くタイプとの葉の形態の違いは確認できていない。一方、斜平山でオオイワカガミの群落に遭遇した際には、明らかにイワカガミとは異なる葉の特徴を認識できた。同年、飯豊山麓でもオオイワカガミの白花種を発見している。オオイワカガミとイワカガミの区別性は葉の形態と植生地で識別できるが、コイワカガミは認知できていない。今では、コイワカガミは植生地に順応した生態型ではないかとの結論に至っている。



コメバツガザクラ (*Arctericia nana* ツツジ科コメバツガザクラ属)

吾妻・安達太良山城の偽高山帯の岩場や砂礫地に植生する常緑樹。樹林帯には植生せず、山城の限られた岩床にコロニー状に植生する。一属一種である。別名のハマザクラは高山の砂礫地を御浜と呼ぶことからつけられたと言う。岩場を走る細い茎の下部からは細根が発生する。茎は分岐して直立し葉を着生し、その先端に花序を形成する。種小名の「nana」は「小さい」という意味。

葉は本来、対生であるが、通常は3輪生する。葉形は長楕円形で肉厚。葉縁は鋸歯が無く、裏側に巻く。葉身の先端には黄色の腺体がある。中央を走る主脈は明瞭であるが、支脈は目立たない。裏面は淡い黄緑色である。

花は頂性で、葉と同様、3個のつぼ状の白い小花を咲かせる。条件がよいと3個の小花群が連なって咲く。花冠先端は5裂し、裂片は平開しない。裂片は浅く波状に縁どられている。雄しべは8個または10個である。葯は赤色で2本の角を持つのが特徴。萼片は5枚で赤味を帯びる。

コメバツガザクラの開花は融雪日からの気温の影響を受ける。融雪日を起点として開花までに要する5℃以上の有効積算温度はウラシマツツジと同様に最も少なく、日平均気温10℃の日が12日程度で開花するとの報告がある。開花までの低温要求性が少ないということは、温度変化に敏感であることを意味する。岩場に植生するコメバツガザクラの開花は、岩場の気温の影響を受けることになり、植生する岩の大きさや、方向、日差しや風当りなどによって、微妙に開花の時期が変化しやすいという事になる。

箕輪山は、山登りを始めた頃から、毎年必ず登りたくなる山である。1997年の6月に、思い立って箕輪山頂を目指した。その下山時に、山頂近い岩場に隠れるように咲く小さな花を見つけたのがコメバツガザクラとの最初の出会いであった。私は、子供の頃に見たジョルジュスーラの点描画に魅せられて以来、小さな個性の集合体で形作られる造形を見ると忘れられない習性がある。コメバツガザクラはそのような私の習性にぴったりとはまった。



第135回自然観察会案内：早稲沢夏の山岳植物観察会

日時：2014年7月6日（日）7：30～16：30

集合場所 四季の里正面入り口駐車場（あづま公園橋側） 集合時間 7：30 参加定員 20名

内容：早稲沢から布滝を経て百貫清水まで散策し、溪谷林とブナ林に咲く山岳植物を観察します。

準備するもの：昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、手袋、帽子、着替、昼食、テルモスまたは水筒、嗜好品、食器、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳など（ルーペ・双眼鏡・各種図鑑）

*その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費：保険代 (320円：消費税増税に伴い値上がりしました) 申し込み：7月5日(土)まで

参加申込先：佐藤守 (024-593-0188:午後7時～9時)へ電話またはメールにてお願いします

第136回自然観察会案内：龍ヶ岳自然林と鳩峰峠の植林地観察会

日時：2014年9月28日（日）7：00～16：00

集合場所 国道13号でん六跡駐車場

集合時間 7:00 参加定員 20名

内容 鳩峰峠龍ヶ岳のブナ林の紅葉を観察します。散策後は恒例の芋煮会です。その後、植林後の樹木の成長の様子を確認します。

準備するもの 昼食、登山靴・長靴等、嚢具、スパッツ類、帽子、手袋(軍手複数)、着替、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳など（ルーペ・双眼鏡・各種図鑑）

*装備、その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費:保険代 (320円：消費税増税に伴い値上がりしました) 申し込み:9月27日(土)まで

参加申込先：佐藤守 (024-593-0188:午後7時～9時)へ電話またはメールにてお願いします

国土強靱化法を知っていますか

1. 国土強靱化法の正式名称は「強くしなやかな国民生活の実現を図るための防災・減災等に資する国土強靱化基本法」で2013年12月に制定されました。
2. **法律の目的**：法律の名前からすると、「防災・減災」などの災害対策のための法律の様な印象を受けますが、これに限らず、「国民生活」や「国民経済」などにも資する幅広い事業が対象となる目的となっています。
3. **法律の「国土強靱化」の定義**：「事前防災及び減災その他迅速な復旧復興並びに国際競争力の向上に資する国民生活及び国民経済に甚大な影響を及ぼすおそれのある大規模自然災害等に備えた国土の全域にわたる強靱な国づくり」と定義しています。事業の採択要件の概念が曖昧でどのようにも拡大解釈が可能な定義になっています。
4. **事業の対象は防災・減災に関する事業だけなのか**:国土強靱化法の目的には「国際競争力の向上」も含まれているので防災・減災に限らず、あらゆる事業を対象として進めることができます。
5. **会議の公開性**：国土強靱化法では、会議の公開や、議事録の作成・公開を定めた規定はありません。重大な公共事業の推進について、検討内容が明かされないまま決定される可能性がある。
6. **市民参加の保証**:現行の公共事業の根拠法となっている国土形成計画法や、社会資本整備重点計画法で定められている国民の意見を反映させるためのパブリックコメントの規定がない。一般の国民には会議に関する情報などを公開せず、意見を反映することもないまま計画を策定することが可能な法律です。
7. **決定権**は:基本計画は推進本部が作成し、閣議決定のみで実施される。国会議決も不要。すなわち政府のやりたい放題の法律

(自然保護 N0.538 より抜粋しました)

国土強靱化法は既に飯豊山の麓を流れる最上小国川ダム建設問題に重大な影響を及ぼしています

新年度の会費納入をお願いします：郵便振替02170-0-24351「高山の原生林を守る会」へ

「高山」高山の原生林を守る会会報 第89号 2014年6月発行

編集・発行：高山の原生林を守る会 HP：<http://www15.plala.or.jp/adumatakayama/index.htm>

代表連絡先：佐藤 守 Phone 024-593-0188 (夜間7時～9時)

郵便振替：02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」

入会方法：年会費(500円)を添えて上記まで

編集：佐藤・奥田・鈴木